

祐善寺だより

第33号

発行日

2014年10月10日

真宗大谷派 祐善寺 住職/岡崎 賢 福井県丹生郡越前町上糸生20-2 TEL 0778-34-5170 FAX 0778-34-5170



ページ

私の人生の頁を
めくってみると
みんな色あせて
いるけれど
それぞれの頁
懸命に生きてきたのよ
破きたくなった
頁もあつたわ
でも今ふりかえると
みんな なつかしい
あと一頁と少しで百頁
鮮やかな色が
待ってるかしら

柴田トヨ

法句に憶う おも

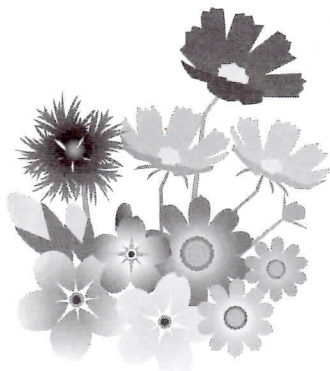
住職 岡崎 賢

この詩の作者である柴田トヨさんは、九十歳を過ぎてから詩を創りはじめ、九十八歳の時に発行した処女詩集『くじけないで』は、売上げが百五十万部を超え、世界最高齢のミリオンセラーの著者と呼ばれました。

トヨさんの、どの詩からも、苦難の人生を生き切ってこられた、なんとも言えないぬくもりや優しさが伝わってきます。

辛かった時も、苦しかった時も、人生に絶望しそうになった時も、トヨさんの言葉で言えば、「破きたくなかった」時も、振り返ってみれば、皆、自分にとって懐かしい、自分を育んでくれた人生の一ページであった、と述懐されておられます。

トヨさんは、昨年一月、惜しくも百一歳で亡くなられましたが、確かに、高齢社会と呼ばれる中であって、柴田トヨさんの生きざしが、私たちに希望を与えて下さったことには間違いありません。



楽しかった!

祐善寺納涼祭

二〇一四



納涼祭も五回目となった今年は年明け早々から、『ごつやったら、沢山来てもらえるかの。』『何か新しい企画はできんやろか。』などの声が聞かれました。五月の役員会で七月二十一日開催と決まり、六月の実行委員会では松島守さんに委員長をお引き受け願って、いよいよ本格的な計画と準備が始まったのです。

新しい企画として餅つきを採り上げましたが、夏の餅つきで喜んでもらえるだろうかという心配がなかったわけではありません。でも結果は、大成功であったと自負しています。

こうして、百七名ものご参加を頂いて、今年もまた実に盛大に『祐善寺納涼祭』を開催できました。参加して下さった方並びに、何かとお骨折り下さった方々に、心から御礼を申し上げます。有り難う御座いました。ご先祖の皆様方も沢山の山の人で賑わう境内の様子をご覧になって、

きつと喜んで下さったことであまりましよう。有り難いことです。

楽しかった納涼祭を、写真で振り返ってみました。

暑い本堂での開会式。
『暑さに負けずにみんなで楽しみましょう。』



これから何が始まるの?

流しそうめんの裏方も忙しかったです。



ご住職も一生懸命で皆さんへのサービスに努められました。



「ケブテー」なんて言ってたのでは、この係は務まらないのであります。



委員長さんのお餅つき。おいしいお餅ができました。

参加者からひとこと

お餅つきは正月のものと思っていただけ。真夏のお餅つきって考えられなかった。きな粉餅を口にしたわたしは、「うわーおいしい」と、思わず大声をだした。こんなに美味しいお餅を食べたことがないと思うほど、美味しかった。

つきたての熱々のお餅の美味しさは、今も忘れられないです。

来年の納涼祭の「お餅つき」を心待ちにしています。





『大漁』

金子みすゞ

朝焼け小焼けだ

大漁だ

大羽鰻の大漁だ。

濱は祭りの

やうだけど

海のなかでは

何萬の

鰻のとむらひ

するだろつ。



私はこの詩を読んだ時、心に強い揺さぶりを感しました。大漁を喜ぶのは漁を生業とする人なら当然のことであり、農に就く者なら豊作を喜ばない人はありません。でも、この詩を書いた金子みすゞは、それだけでは留まらなかったのです。

水揚げされた沢山の鰻に喜ぶ海边の人達に隠れて、親兄弟だけでなく親族みんなを奪われた悲しみに震えている鰻達がいるはず。彼らは海の中で静かにお申いの準備を進めていることでしょうか。みすゞはそんな鰻達の心の悲しみを見逃さなかったのです。

私はこの世に生を受けてから七十余年、その間に美味しい物もそれなりに沢山食べさせて頂きました。すき焼き、しゃぶしゃぶ、刺身、寿司、干物、どれも旨かったなあ…。

ところが金子みすゞのこの詩を読んで、あの旨かった物の全ては自分以外の命だったと改めて気付きました。毎日旨いウマイと言いながら沢山の命を頂いて、自分の命を長らえてきたのです。私という一人の人間が生きているというただそれだけのために、どれだけ沢山の生き物たちを悲しませてきたことか。私はこの詩に、自分という存在の罪深さを教えられたような気がします。

私達人間は、生きるというただそれだけのために、他の命を際限なく奪い続けているのです。しかも、自らの罪深さに気付いたとて、それをやめることは出来ません。それは宿命とでもいうべきでしょうか。

『心配されるな。そんな罪深い私達を救って下さるのが阿弥陀様ですよ。』と、親鸞様は優しく説いて下さっております。もう少し、詳しく学ばせて頂かねば…。

(野村軍一)

平成26年度護持費の志納よろしくお願ひします

祐善寺を永代に互つて護持していただくために、護持費をお願ひしておりますが、今年も次のおりご志納下さいますようよろしくお願ひします。

◇護持費の使途

- ・ 報恩講の厳修費や教化事業の実施
- ・ 本堂を守る火災保険や環境維持費用
- ・ 本山相続講、福井教区賦課金等
- ・ その他

◇年額

一戸平均 一〇、〇〇〇円

◇志納方法

- ・ 寺へ直接志納する
- ・ 秋まわりや法事で住職が貴家を訪問の際に志納する
- ・ 地区の役員さんに志納する
- ・ 郵便振替口座

(〇〇七七〇一九一三〇七二一)

・ 加入者 祐善寺

へ振り込む

◇志納期限

毎年十一月末日



祐善寺だより三十一号でお知らせしました二つの活動の一つ。七月二十一日に実施されました祐善寺納涼祭のお手伝いについて、嬉しかった事を一つご紹介いたします。

受付をしていた時のことです。女性の方が三人でこられました。にごこ笑顔で話された言葉「いつもありがとう。来年はお手伝いさせていただきます。」

とても、とても嬉しかった言葉です。今も耳に心地良く残るありがたいお言葉です。来年の納涼祭をご一緒できることを、楽しみにしています。

参加された方々、祐善寺だよりなどから婦人部の活動が、ほんの少しずつだけでも、広がっていることを感じています。

報恩講前のお手伝い

日時 十月十九日(日)

午前九時～十二時

内容 掃除 窓ふきなど

時間帯に関係なく、ご都合のつく時間にきていただけると助かります。一時間だけのお手伝いも結構です。足、腰のわるい方も、お顔を見せてくださるだけでも嬉しいです。緑に囲まれた祐善寺、澄んだ空気いっぱいの祐善寺でお話をしましょう。お待ちいたしております。

(桑原文子)

祐善寺永代経会へ 初めて参詣して

福井市菜崎町

上田 十二恵

七月二十三日、父が八十八歳で急に亡くなりました。寺参りの時に、ご住職より永代経会のご案内を頂きました。

「永代経会」御齋について何だろうと思いました。当日、十時半頃に到着しました。御齋の用意は、主に小倉地区の方々が行っておられました。暑い中を汗を拭いながら沢山のお料理を出して頂き、またこれが心のもった愛情のスパイスがどつぷりに入った手造りの味!!母共々、びっくり本当にどれをとっても美味しいも

のばかりでした。母と二人共、食べ過ぎる程、沢山頂き、お腹いっぱいになりました。

続いて、永代経会法要を頂き、正円寺住職佐々木師の布教がありました。お世話をされている檀家の方々を拝見し、祐善寺の檀家のまともり、絆の強さを感じました。

物故者総墓収骨は初めてのことで、七体のお骨の箱が並んでいました。父は、一番新人でした。住職や遺族が、一人一人のお骨を手にとつて納骨される様子もまた、ジーンと胸を打たれました。父は、元気な頃は、いつも、「森のお寺」と口にしておりました。父のお寺を思う気持ちに、ほんの少し近づけた思いがしました。実家が、こんなに素晴らしいお寺の檀家であった事に、嬉しい安らいだ気持ちになりました。

この八月七日は、私にとって父の納骨を機に、生涯の大事な日になりました。また、「小倉地区」の方々とお知り合いになれたのも、私の宝物です。皆様、本当にお疲れ様でした。本当に素晴らしい一日を有難うございました。

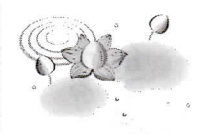
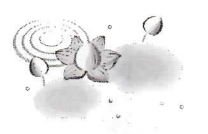
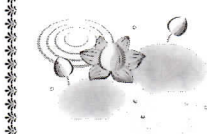


おくやみ

小川小太郎様(福井市菜崎町)には、平成二十六年七月二十三日、行年八十八歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。

木下リツ才様(越前町森)には、平成二十六年八月十六日、行年八十八歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。

野村初治様(越前町小倉)には、平成二十六年八月二十六日、行年九十四歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。





第二回

親鸞聖人御絵伝
 青蓮客殿・得度剃髪



絵図左は、青蓮院の客殿で、親鸞（幼名を松若丸と呼ばれた）は、伯父の範綱に伴われて慈円僧正にご対面しているところです。

弱冠九歳の親鸞は、期するところがあつて出家を志し、慈円僧正に得度を懇願しましたが、慈円僧正は、まだ九歳ゆえ、暫らく勉強を修めてから出直すように諭しましたが、親鸞は、折りしも庭に咲き乱れる桜花にことよせて、

あすありと思う心のあだ桜
 夜半に風の吹かぬものは

と、歌に自らの気持ちを表して、今日のうちに是非とも得度を、とせがまれたので、慈円僧正も感ずるところがあり、得度式はその日の夜に執行することを承諾されたのでした。

絵図右は、青蓮院仏殿にて、親鸞得度受式の図です。出家名は、伯父の「範」を入れて「範宴」と命名されました。

範宴を名告った親鸞は、その後、二十九歳まで比叡山で天台をはじめ、あらゆる聖教の研鑽を積まれ、横川の常行三昧堂では、堂僧としての苦行に精励されたのです。

「親鸞聖人御絵伝」

浄土真宗の宗祖、親鸞聖人のご生涯を広く讃えんがために、親鸞の曾孫に当たる本願寺第三世覚如上人が親鸞聖人の求道の歩みを詞に著し、初稿本の絵は、親鸞聖人の直弟西仏房の孫、淨賀法眼に描かせています。

詞の部分「御伝鈔」、絵の部分「御絵伝」と呼び、各寺院の報恩講において御絵伝四幅を余間に奉掛し、厳肅に御伝鈔が拝読されます。

参考文献『親鸞聖人伝繪』

其の29

事 仏
 一口メモ

中陰

人が亡くなつてからの四十九日間を「中陰」といいます。この期間は、特に身近な人の死が、悲しみとともにいよいよ実感されるときでもありません。

ところで、一般的なか陰の考え方を申しますと、中陰とは、人が亡くなつてから新たに生まれ変わるまでの中間的なあり方をさしていわれています。

この中陰の間に、残された者が、七日ごとに故人の冥福を祈り追善供養をなせば、死者はその功德を受けて必ず善処生まれるという考え方です。

このような来世を想定し追善供養を勧める考え方が、実は真実の仏教とは無縁の、人の心を惑わすさまざま迷信・俗信を生んできました。すでにお話ししました、死装束といわれる死者の旅姿や魔よけと称する守り刀を棺の上にのせるなどが、それに当たりましよう。

このような背景には、迷わずに成仏

してほしいという亡き人への思いがあるからでしょう。このおもいがいかに切なる願いであっても、我執に基づくものである限り、ますます人間を迷いの世界に導くだけであります。亡き人への供養と申しても、思い上がりというほかありません。

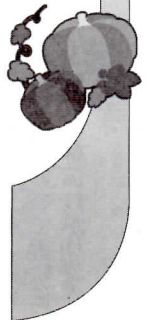
そういう人間自身のもつ深い心の闇を見据えて、親鸞聖人は、「現世に正定聚のくらしに住する」という教えを説かれました。「人間の知恵では計り知れない仏さまの大いなるいのちに目覚めることができました。そのいのちを真の依り所として生きていきます。ですから、来世の幸せを願う必要もありませんし、過去を悔やむ必要もありません」という、亡き人も残された者も共に救われる教えです。

私たちにとって、まず大切なことは、「いまある人生をどう生きていますか」「真の依り所をもって生きていますか」という仏さまからの、亡き人からの問いかけに静かに耳を傾けることです。生まれた意味や生きる喜びに出あつとき、亡き人に手が合つのです。

浄土真宗の中陰（四十九日間）は、身近な人の死の事実をおして、人間としての生き方・あり方を仏さまから学ぶ大切な期間なのです。

（サンガ）より

お知らせ



報恩講御案内

十一月二日(日)

日中 午前十時

御齋 午前十一時半

逮夜 午後一時半

法話 出雲路善公師

つきましては、親鸞聖人の御遺徳を偲び、右の通り報恩講を厳修いたしますので、万障お繰り合わせの上、御家族、御近所、御法友お誘い合わせの上、何卒御参詣下さいますよう、御案内申し上げます。

ボランティア募集!!

雪囲い作業奉仕

と き 十一月九日(日)

八時集合(小雨決行)

持 物 鎌(カッター)、軍手、合羽(雨天時)等

傷害保険 加入します。

作業内容

雪囲い作業は、高所での作業ばかりでなく、高所が苦手な方は、下で雪囲いシートのヒモ結びや資材運び等の作業もありますので、ご都合のつく方は、是非ご協力をお願いします。

お願い

甚だお手数ながら、ご協力いただけます方は、前日までに祐善寺へご連絡下さいますよう、お願いいたします。



平成二十六年度の 年忌法要を お勤め下さい!

本年度の年忌は左記のとおりでございますので、貴家の過去帳等をご確認していただき、皆様にとられてかけがえないご先祖様の年忌法要を是非、勤めて下さいますよう、お願いいたします。

- 五十回忌 昭和四十年没
- 三十三回忌 昭和五十七年没
- 二十五回忌 平成二年没
- 十七回忌 平成十年没
- 十三回忌 平成十四年没
- 七回忌 平成二〇年没
- 三回忌 平成二十四年没
- 一周忌 平成二十五年没

編集後記

仏事のアラカルトについて、述入ます。

★焼香の仕方について

まず、尊前に進み、ご本尊を仰ぎみて、身を正し、軽く頭を下げます。次に、右手で香盒こうごうのふたを取り、焼香を二回します。この時、大谷派(お東)では、香を額ひたいでいただくことはしません。

そして、右手の指先で香の乱れを直してから、香盒のふたをします。(なお、あとに焼香者が続いているときには、香盒のふたはしません。)

その後、静かにしみじみと、合掌礼拝して、もとの席に戻ります。

★7月の納涼祭には、たくさんの方が参加者があり、今年もとても盛大に開催することができました。

うちの夕食時、そうめんが出てきたら、孫が、流しそうめんにして欲しいと言う。今、すぐにはできないと言いつつ、「お寺で、トマトやゼリーが、そうめんと一緒に流れてきて、おもしろくて、おいしかった」と言いました。孫も、納涼祭を楽しんだようです。

参加されたみなさん、ありがとうございました。一度も参加されていない人は、来年は是非とも参加してみてください。

(渡辺千代一)